愛知教育大学研究報告，39（人文科学編），pp. 75～90，February，1990

萩原朔太郎――「愛憐詩篇」から「浄罪詩篇」へ

渡　辺　和　靖

Kazuyasu Watanabe

（哲学教室）

(1)「海と恋人」のテーマ

大正２年末から翌年の秋にかけて，すなわち「愛憐詩篇」後期から『月に吠える』期へいたる過程で，朔太郎の作品のうちに，海を背景に恋人と交歓するという，きわめて特徴あるテーマが顕在化する。このテーマは，朔太郎自身，その出現に，つよい禁忌の意識をいだいているかのように，ながいためらいののちに，ようやく姿をあらわし，さまざまな変奏をくりかえしながら，この時期の作品の底に，いっかんして鳴り響いている。

この「海と恋人」のテーマがはじめて出現する，「歓魚夜曲」は，「恋魚夜曲」の題で「習作集第八巻」に収められている。「(一九一三，五，鎌倉ニテ)」の日付があるものの，８月から９月にかけて作られたものの間に配列されており，しかも，改題されて雑誌に公表されたのは，さらにおくれて，11月になってからのことであった。推敲の期間を考慮するとしても，この六ヶ月は長きにすぎる。ここに，すでに，朔太郎が，このテーマを展開することに，つよいためらいを感じていたことをうかがわせるものがある。

> 光り虫しげく跳びかへる／夜の海の青き面をや眺むらむ／あてなき瞳遠く放たれ／息らひたまふ君が側へに寄りそへるに／浪はやさしくさしきたり／またひき去る浪／遠き渚に海月のひもはうちふるへ／月しらみわたる夜なれや／言葉なくふたりさしより／涙ぐましき露台の椅子にうち向ふ／このにほふ潮風にしばなく鷗／鱗光の青きに水流れ散りて／やまずせかれぬ歓魚の身ともなりぬれば／今こそわが手ひらかれ／手はかたくあふるゝものを押へたり。(部分『萩原朔太郎全集』――以下『全集』――第３巻，41頁，筑摩書房)

背景は，海。そこに，「君」と呼びかけられる恋人がいる。波のまにまに「光り虫」と「海月」を浮かべた月夜の海辺に，言葉を失って「ふたり」は，ただよりそう。「歓魚」は，いわば，そうした恋人との交歓のメタファである。

ところで，この「歓魚夜曲」が掲載された『創作』の同じ号に，のちに「愛憐詩篇」に編入された，「習作集第八巻」では「歓魚夜曲」のすこし前に配列されている，「浜辺」がならべて掲げられている。これも，また，海の歌である。

> この身のかげに咲きいづる／時無草もうちふるへ／若き日の嘆きは貝がらをもてすくふよしもなし／ひるすぎて空はさ青にすみわたり／海は涙にしめりたり／しめりたる浪の打ち返す／かの遠き渚に光るは何の魚ならむ。／若ければ一人浜辺にうち出でゝ

／音も立てず洋紙を切りてもてあそぶ／このやるせなき日のたはむれに／かもめどり／ぴよろぴよろと涯なき地平をすぎも行けり。（部分『全集』第2巻，21頁）

末尾に「（大正二年八月十七日）／四万ニテ」の付記があり，「歓魚夜曲」とは別の機会に制作されたものであることがわかる。しかし，両者を比較してみると，「浪」「渚」「魚」「鷗＝かもめ」など，共通する言葉が少なくない。さらに，「歓魚夜曲」の草稿と推定される断片には，「このしめりたる潮風にしばなくかもめ」「ああまたさしぐみいづる涙み膝をぬらしぬ」（『全集』第3巻，508頁）など，感傷過多のフレーズが残されており，これは，「浜辺」の「海は涙にしめりたり／しめりたる浪の打ち返す」という部分に対応している。こうしてみると，両者の間にはあきらかに類縁関係が認められる。

しかし，「浜辺」では，海辺に立つのは朔太郎ひとりであり，そこに恋人の姿はない。この「浜辺」にかぎらず，「愛憐詩篇」に収録された詩篇を子細に検討してみると，つぎのような事実にゆきあたる。「浜辺」や「月光と海月」のように，海を背景とした作品においては，恋人の存在が消し去られており，「緑蔭」や「再会」のように，「きみ」＝恋人の登場する作品においては，海という背景は注意深く排除されている。つまり，海と恋人を結びつけた作品は，「愛憐詩篇」には一篇も採用されていない。

ここにも，「海と恋人」のテーマにたいする，朔太郎の強い禁忌の意識がはたらいていることがわかる。『月に吠える』出版の時点ですでに「愛憐詩篇」の編集が意図されていたことから考えて（「詩集例言」参照），はやくからそれは，心の奥底に秘めかくすべきものとして意識されていたといえる。

「習作集第八巻」の，「浜辺」よりさらに少し前に配置された，これは雑誌にも公表されず，未定稿のまま残された，「月見草」と題する作品がある。

あゝ　この花の黄いろきを見てあれば／こゝろまたひとつになりて人を恋ふ／たれを待つとしはなけれども／かくも素直にわが待ち居れば／そつと来て　接吻（くちづけ）のして欲しや／たれにてもあれ／にほひよき女欲しやとうち嘆く／我が若き瞳のみず〳〵しさと哀しさと／空の蒼きに鳥飛んで／さらさらと砂は素脛をこぼれ落つ／この長き浜辺にあるは我れ一人／あゝたゞ一人／たそがれて月見草の花は咲き出づ。（部分『全集』第2巻，428～9頁）

「（一九一三，五）」という日付をもつこの作品が，「歓魚夜曲」と同じ海を描いたものであることは疑いあるまい。「たれにてもあれ」といいまぎらされている部分は，この作品の草稿と推定される断片では，「あさまだきここに来りて／わがつむは宵待草の白きなれども／君を待つ心やいかに」と，はっきりと「君」＝恋人が指定されている。（『全集』第3巻，507頁）しかし，海辺に立つのは朔太郎「たゞ一人」。ひとりであることの「哀しさ」が，非在の恋人を呼び求めるという構造を，この作品はもっている。

久保忠夫氏の考証によって，大正二年の五月一〇日から一四日にかけて，朔太郎は，妹ユキをともなって，鎌倉に遊んでいることが確かめられている。この旅は，七里ヶ浜に病気療養中の，かつての思い人，佐藤（旧姓馬場）ナカをたずねての旅であった。しかし，朔太郎は，その家をたずねあぐねて，空しく帰途につく。（「朔太郎の恋――エレナといへる女性について」『東北学院大学論集（一般教育）』昭和36年9月，94～6頁）

「（一九一三，五，鎌倉ニテ）」の日付をもつ「歓魚夜曲」，「（一九一三，五）」の日付をもつ「月見草」はもちろん，「（大正二年八月十七日）／四万ニテ」の日付をもつ「浜辺」

を含めて，これら三つの作品が，いずれも，ナカをたずねての鎌倉行に触発されて制作されたものであることは間違いない。

事実にそくしていえば，ひとり海岸にたたずみ非在の恋人を思うという「月見草」が，もっとも率直に朔太郎のおかれた現実を吐露したものである。「習作集第八巻」の配列が示すように，この「月見草」が，まず成立し，他の二作品の母胎となったと考えられる。「月見草」に，初期「愛憐詩篇」に多用され，後期にいたって姿を消す，「ども」語法が使用されていることも，この推定を傍証する。この作品が公表されなかった理由も，そのあたりに求められるだろう。つまり，「浜辺」と「歓魚夜曲」を生みおとすことで，「月見草」はその役割を終えたのである。

のち，朔太郎は，彼の影響下にあった二人の青年にたいして，「旧作」としてこの「月見草」を示し，「幼年期の真実は，人間の一生の中で最も尊重すべきものです」と語っている。（推定大正四年，奈良宇太次・金井津根吉宛「書簡」『全集』第13巻，467頁）

このことからわかるように，「月見草」は，「幼年期」＝「少年時代」への回想を歌ったものである。そこで呼び求められたのも，回想のなかの恋人であったと考えられる。その根底に流れるのは，初期「愛憐詩篇」に共通する，甘やかな回想のモチーフである。

「浜辺」は，「月見草」において過去へむけられていた視点を，現在へとむけかえ，孤独な現実を凝視し，感傷とともにそれを哀惜するところに成立した。そして，「歓魚夜曲」は，さらに，涙にぬれた感傷を切りすて，現在という時点に，「恋人」をふたたび配置するという虚構において成立した，と考えられる。

「渚」と題する，「歓魚夜曲」の草稿と推定される未定稿には，「浜辺」に歌われた世界から，「歓魚夜曲」の世界が誕生する過程が示されている。

> 女はかなしくよりそひて／わが手をみつむ／夕浪のひき去りゆく渚に座（ママ）り／ほの白く光りて残る渚を指さし／われ等なにごとか語らむと思ふなり／愛なくしてときのすぎゆくわびしさは／この言葉なきかたらひのひまに。（『全集』第3巻，507頁）

描かれたものは，恋人との交歓であるが，歌われているのは，孤独の「わびしさ」である。呼び求められた「女」は，ここではまだ，まぼろしのように現実性を失っている。「歓魚」というメタファを手にすることによって，朔太郎は，回想のなかからつむぎだされた虚構の世界に，なまなましい具体性を賦与することに成功したといえよう。

「月見草」と「浜辺」が，失われたものを悲しむ，回想のモチーフに色どられているのにたいして，「歓魚夜曲」は，その現在性によって特徴づけられる。現在という一点において，恋人との交歓という空想を，海を背景として，ほしいままにくり広げることによって，それは獲得された。つまり，ここにおいて，「少年時代」の回想のうちに自足する「愛憐詩篇」の世界を突き破るようにして，新しいもう一つの世界が，頭をもたげはじめている。大正二年五月から一一月にいたる六ヶ月の間に，朔太郎は，過去の日を哀惜するおのれの執着をふりすて，新しい世界の創造へとむかったのである。

(2) 主題と変奏

長いためらいのあとで，強い抑制をおし破り，「歓魚夜曲」のうちに頭をもたげた，「海と恋人」のテーマは，年をこえて，大正3年にいたって，さらに大胆に展開されることになる。つぎに引くのは，『創作』大正3年7月号に発表された「交歓記誌」である。

みどりに深き手を泳がせ／涼しきところに歯をかくせ／いま風ながれ／風景は白き帆をはらむ／きみはふんすゐのほとりに家畜を先導し／きみは舞妓たちを配列し／きみはあづまやに銀のタクトをとれ／夫人よ，おんみらはまた／とく水色の藤椅子に酒をそそぎてよ／みよ，ひとびときたる／遠方より魚を光らし／先頭にあるは指もて十字を切るごとし／女は左に素脚ひからし／男は右にならびて杖をとがらす／みよ愛は行列のしりへに跳躍し／淫楽の戯奴は靴先に鈴を鳴らせり。／ああ，ともがらはしんあいなり／遊楽は祈禱の没落／霊肉の音の交歓／いま新らしき遊戯は行はれ／遠望の海さんさんたるに／われ諸君とゆびさし／眺望してながく塔下に演説す。（『全集』第3巻，59～60頁）

まさしく，題名が示すとおり，ここには，「舞妓」「酒」「淫楽の戯奴」「遊戯」などの語のかもしだす，はなやかなエロチシズムに色どられた，「きみ」と呼ばれる「夫人」との，祝祭のような「交歓」風景が展開されている。そして，その背景には，白い帆を浮かべた「遠望の海」がある。

「きみ」と呼びかけられた「夫人」とは，しかし，いったい，なにものだろう？　この作品の草稿には，それがはっきりと示されている。「＜先頭に≪ありて≫たちて＞遠方にあるは魚肉を捧＜ぐるは我の恋びと＞げ／｛恋びとは＜路に逍遥＞歩・恋人の歩＜道にむかひ＞む道路・＜歩道は銀の＞・恋人の路を｝」（『全集』第3巻，429頁）

決定稿にあっては抹消されているが，これで見ると，「夫人」とは，あきらかに「恋人」を意味していることがわかる。それが「夫人」と呼びかけられるのは，「恋人」がすでに人妻となっているからであろう。「おんみら」と，複数形になっている部分も，草稿では，はじめ「きみは」と書かれて，あとで消されている。

「交歓記誌」は，「歓魚夜曲」において出現した，「海と恋人」のテーマを，さらに拡大して展開させたものである。しかも，拡大されることによって，このテーマは，「十字」「祈禱」などの語が示すように，ある種の宗教性を帯びはじめている。

「家畜」という語にかんして，小関和弘氏は，前橋市立図書館所蔵の，朔太郎がこの時期愛読した『聖書』の，「創世記」第1章第1節から31節までに朱線が引かれているなかに，「神言たまひけるは地は生物を其類に従て出し家畜と昆虫の地の獣を其類に従ひて出すべしと即ち斯なりぬ」とある部分がヒントになったと指摘している。（「＜浄罪詩篇＞への道――朔太郎詩の問題の所在」『語文論叢』昭和56年9月，27～8頁）

朔太郎の愛読した『旧新約全書』（明治32年12月，大日本聖書館）との関連でいえば，「交歓記誌」は，「創世記」よりも，「雅歌」との関連が深い。朱線の引かれたつぎのような部分は，あきらかに「交歓記誌」に描かれた世界に影を落としている。

わが愛する者の声きこゆ，視よ，山をとび，岡を躍りこえて来たる（中略）わが愛する者は我につき我はかれにつく，彼は百合花の中にてその群を牧ふ　わが愛する者よ，日の涼しくなるまで，影の消るまで身をかへして出ゆき，荒き山々の上にありて獐のごとく，小鹿のごとくせよ（第2章第8～16節）

「雅歌」全体にわたって，エンピツ，赤ペン，細太二種の万年筆などによって，各種の傍線がほどこされており，朔太郎がそれを熱心に読み，そこに描写された「わが愛する者」への讃歌に，強い印象を与えられたことを示している。

しかし，ここに見られる宗教性は，キリスト教の直接的な反映というよりも，恋人への

思いが，その不可能性のゆえに，宗教的な表現へと抽象化されたものと考えるべきであろう。「遠望の海さんさんたるに／われ諸君とゆびさし／眺望してながく塔下に演説す」という終結部は，朔太郎自身が，恋人との交歓から疎外されていることを暗示している。(1)

もともと，「歓魚夜曲」に描かれた恋人との交歓が，その非在を契機とする虚構にほかならなかったが，「交歓記誌」では，それが，その不可能性を代償として，さらにほしいままに拡張され，宗教的な幻想にまで高められているというべきであろう。また，その背後には，「海と恋人」のテーマへの禁忌の意識が働いていたと考えられる。

こうした，宗教的な観念性へとむかう傾向は，「交歓記誌」と同時に『創作』に掲載された，「供養」において，より鮮明に顕在化している。

女は光る魚介のたぐひ／みなそこ深くひそめる聖像／われ手を伸ぶれど浮ばせ給はず／しきりにみどりの血を流し／われはおんまへに礼拝す／遠くよりしも歩ませ給へば／たちまち路上に震動し／息絶ゆるまでも合掌す（部分『全集』第3巻，60～1頁）

ここには，「海と恋人」のテーマは，はっきりとした形では見られない。しかし，「魚介」「みなそこ」などの語が海を，そして，「女」「おんまへ」が，恋人を意味することを考えれば，その変奏であることは，よういに理解されよう。いわば，恋人を求めるはげしい思いが，その希求の無効性のゆえに，「礼拝」「合掌」という語が示す，宗教的な感情にまで高められているといえる。そして，恋人という具体的な存在は，「みなそこ深くひそめる聖像」というメタファへと抽象化されている。

同じ7月，朔太郎は，『詩歌』に，「遊楽」「みらくる」の二篇を掲載している。それぞれ，「遊泳」「瞳孔のある海辺」と改題して，『蝶を夢む』（大正12年刊）に収録された。これらは，ともに，海をテーマとした作品であり，とりわけ「みらくる」は，「交歓記誌」や「供養」との類縁が深い。「みよ烈日の丘に燃ゆる瞳孔あり，／おん手に魚あれども泳がせたまはず，／聖者めんめんと涙たれ，／はてしなき砂金の路をふみ行き給ふ。」（部分『全集』第1巻，333頁）

「おん手に魚あれども泳がせたまはず」の一行が，「供養」の「われ手を伸ぶれど浮ばせ給はず」と同じ感情を表現したものであることは明白である。しかし，ここには，恋人の姿はおろか，「女」の影すら見えない。「聖者」という，いささか宗教的な存在のうちに，恋人へのはげしい思いはかくされている。

幾重もの抽象化をへた「みらくる」と「遊楽」が，『蝶を夢む』に拾遺されたのにたいし，「交歓記誌」と「供養」が，「愛憐詩篇」にも『月に吠える』にも『蝶を夢む』にも収録されなかったところに，「海と恋人」のテーマが，朔太郎にとって，つよい禁忌の対象であったことがうかがわれる。

しかし，恋人を希求するせつなる思いは，そうした抑制をおし破り，『異端』大正3年9月号に発表された，「哀しきわがエレナにさゝぐ」という副題をもつ「岩魚」において，はげしく吐露されることになる。

えれなよ，／信仰は空に影さす，／かならずみよ，おんみが静けき額にあり，／よしやこゝは遠くとも，／わが巡礼は鈴ならしつゝ君にいたらむ，／いまうれひは滝をとゞめず，／かなしみ山路をくだり，／せちにせちにおんみをしたひ，／ひさしく手を岩魚（いはな）のうへにおく。（部分『全集』第3巻，69頁）

「君」「女」「夫人」「恋人」など，漠然とした人称代名詞や普通名詞でしか呼びかけるこ

とのできなかった対象が，「エレナ」という固有名を獲得することによって，突如として，その輝きを増したかのようである。佐藤ナカは，この年の5月17日，高崎市柳川町のハリストス正教会[2]において受洗し，「エレナ」という洗礼名を授けられている。当時，マンドリン・クラブの活動をつうじて，正教会と関係していた朔太郎は，いちはやくその事実を知り，さっそく作品のうちにとり入れたのであろう。

「えれなよ」と，朔太郎は，大胆に，恋人に呼びかける。しかし，それを代償とするかのように，背景の海はまったく消え去り，「魚」のイメージだけが，谷川をはしる「岩魚」に姿を変えて，「信仰」「巡礼」という宗教的な感情をともないつつ，恋人へのせつなる思いを担うものとして引きつがれている。

『地上巡礼』大正3年10月号に掲載された「純銀の賽」にも，「エレナ」は登場する。「ああいまも想をこらすわれのうへ，／またえれなのうへ，／愛は祈禱となり，／賭博は風にながれて，／さかづきはみ空に高く鳴りもわたれり。」（最終連　同，77～8頁）

「エレナ」の語をもちいた「岩魚」「純銀の賽」は，ともに，背景は海ではなく，谷川あるいは湖水を思わせる。これには，四万温泉に避暑していたさいに作られたという事情も考慮される。しかし，朔太郎が，これらの作品で，海のイメージを避けたのは，恋人を「エレナ」という固有名で呼びかけることによって，逆に，恋人と直接に結びつく海のイメージを故意に隠したと考えられる。

「純銀の賽」の草稿，「坑夫の歌」で，「えれな」と「わが君」のどちらを採るか迷っている段階にあっては，「水」のイメージだけがあって，はっきりとした背景は，まだ提示されていない。（同，432～3頁）朔太郎が，決定稿において，「えれな」の方を採用した時点で，海のイメージはすてられ，「水」という共通項を媒介として，谷川あるいは湖水が選択されたと推測される。

「エレナ」の呼びかけをもつ詩篇は，いずれも，詩集のうちには採用されなかった。

(3)「月蝕皆既」

みなそこに魚の哀傷，／われに涙のいちゞるく，／きみはきみとて，／ましろき乳房をぬらさむとする。／この日ごろつかふことなく，／ひさしくわれら霊智にひたる，／すでに長き祈禱ををへ，／いまみれば月も皆既なり，／魚の性はせんちめんたる，／みよ，うみはみどりをたゝえ，／肉青らみ，／いん〜として二人あひ抱く，／歯と歯と合し，／手は手をつがひ，／もつれつゝからまりにつゝ，／いんよくきはまり，／魚の浪におよぎて，／よるの海に青き死の光れるをみる。（『全集』第3巻，86～7頁）

『詩歌』大正3年11月号に掲載された，「月蝕皆既」である。ここでは，「エレナ」という固有名が隠されるとともに，ふたたび海のイメージが，作品の全体にあふれだしている。さきに，「歓魚夜曲」において姿をあらわした「海と恋人」のテーマが，いま，つよい抑制をつき破り，全面的に展開されたかに見える。ただ「言葉なく」「寄りそ」うだけの二人の交歓は，ちょうど一年をへて，「いんよくきはま」るまでに高められている。

久保忠夫氏は，「月蝕皆既」の背景に，「ノート　一」の冒頭に記された，

ゆうべ久しぶりでエレナに逢つた。エレナとは彼女が浸礼聖号だ。二人で月蝕を見て居た。もう僕と彼女との間には恋はない。併し恋以上の不可思議な愛がある。それは深く考へるときは戦慄すべきものだ。僕はいそいで別れた。部屋へかへつてからまつさを

になつてふるへて居た。(『全集』第12巻，5頁)

という朔太郎自身のメモにある，月蝕の夜の出会いを想定し，それが大正3年9月4日のことであったことを考証している（前掲「朔太郎の恋」87頁）

これをうけて，磯田光一は，当時の高崎の佐藤病院（ナカの婚家）の周辺の地形が，「月の出ている夜ならば，この盆地は青い光に照らされた海底のイメージを呈するであろう」と指摘したうえで，「月蝕皆既」の内容から，朔太郎とナカとの間に，具体的な「性行為」があったと推定している。(「夜汽車の窓 —— 萩原朔太郎（四）」『群像』昭和60年10月，306～7頁)

久保氏が指摘するように，「月蝕皆既」は，9月4日の月蝕を契機として制作されたものであろう。しかし，この作品の背後に，人妻「エレナ」との直接的な関係を読み込む必要が，はたしてあるだろうか。

「ノート　一」に記されたメモは，なんら具体的な事実をものがたってはいない。そこには，ただ，朔太郎の主観的な思い込みが，抽象的に記されているだけである。「久しぶりでエレナに逢つた」という記述も，二人が密会したという事実をただちに示すものではない。「エレナとは彼女が浸礼聖号だ」という説明的な記述は，むしろ，二人をへだてる距離を感じさせる。

それから二た月のち，11月7日付の北原白秋宛「書簡」に，朔太郎は，つぎのように報告している。「今夜高崎へエレナに逢つた，口笛を吹いたけれども出て来ない，二時間あまりも家の前で様子をうかがつたけれども要領を得ないので引きあげました」(『全集』第13巻，67頁)

ここで，朔太郎は，「エレナ」に会いにいったことを「逢つた」と記している。主観的な思い込みが強くでている。このあと，朔太郎は，高崎の酒場でヤケ酒をあおり，ふたたび「エレナ」のもとにとってかえす。翌日，白秋にあててつぎのように伝えている。「ゆうべあれから大へんなことをしてしまひました，また未練にもエレナに逢ひに行つたのが失敗のもとです，(中略) 私はエレナのハズに本名を知らした，長い間秘密にして居た二人の交歓もこれておしまひだ」(同，67頁)

これは，朔太郎と「エレナ」との関係が，決定的な＜破局＞をむかえた事件として知られている。しかし，この記述は，少々おおげさにすぎる。朔太郎は，すでに，大正3年1月25日のマンドリン演奏会に「エレナ」夫妻を招待し，単身であらわれた「エレナ」の夫君に声をかけられている。「日記」に，朔太郎は，つぎのように書いている。「S子はたうとう来なかつた。若いハイカラな美男子になれなれしく話かけられた。あとできけば佐藤といふドクトルであつた。私は妙な忌はしい気分に襲はれた。」(『全集』第15巻，123頁)

佐藤のほうは，妻「エレナ」をとおして，とうに朔太郎の存在を承知していたわけである。それを「秘密」と感じていたのは，朔太郎の主観の内部でのことにすぎない。このことからも，「エレナ」にかんする主観的な朔太郎の記述が，朔太郎の側の一方的な思い込みであった可能性がつよくなる。

朔太郎が白秋に報告している，11月7日の夜の＜破局＞は，11月5日付白秋宛「書簡」に記された，室生犀星が，好意をよせていた石尾春子[3]という女性に結婚を申し出てことわられ，「春子」を「暗殺」すると公言した事件（『全集』第13巻，66頁）などに刺激されて，自ら演出したドラマにすぎないと考えられる。[4]

おそらく，朔太郎は，教会での集会やマンドリンの演奏会などの機会に，何度か「エレナ」と同席するようなことはあったろう。[5] そうした，わずかな出会いをたよりに，朔太郎は，自らの内部に，「エレナ」との「秘密」の関係を作りあげていったのであろう。むろん，客観的な事実がどうあれ，朔太郎の主観の内部においては，「エレナ」との関係が，二人だけの「秘密」のものとして感じられ，それが，11月7日の一件によって，決定的な＜破局＞をむかえたと受けとられたということだけは疑うことができない。[6]

終結部において，「いんよく」のきわみが「死」として観念されていることから知られるように，「月蝕皆既」に描かれた恋人との交歓は，現実におけるその不可能性によって裏打ちされている。「習作集第九巻」の末尾近くに，「月蝕皆既」とほぼ同時期，9月はじめに制作されたと推定される，「自画像」という作品が収められている。[7]

> やさしく我の生くる日に／やさしく我の瞳を転ず／ひとみを転ずうみのうへ／ひとみを転ずきみのうへ／またもろもろの魚鳥のうへ／われのあかるき美しき／われのするどきいぢらしき／われの額とわれの唇／われの心とわれの胸／われの思は遠くして／われの愁はいや深し／われのみひとりしみじみと／われのみひとり血をながす（『全集』第2巻，511～2頁）

ここにも，「きみ」と呼びかけられる恋人がおり，背景に「うみ」がある。しかし，「しみじみと」「血をながす」のは，「われのみひとり」である。「月蝕皆既」と「自画像」の関係は，おそらく，さきに見た，「歓魚夜曲」と「浜辺」の関係とパラレルであろう。「月蝕皆既」における，恋人とのはげしい愛の交歓は，「自画像」における，ひとり「うみのうへ」へ「瞳を転ず」る朔太郎の深い「愁」によってたぐりよせられた，はてしもない妄想であったと考えられる。

そこに鳴り響く「海と恋人」のテーマが，「歓魚夜曲」以来のものであることを考えるならば，「月蝕皆既」は，ほとんど完璧に朔太郎の妄想＝虚構であったと推定することができる。「歓魚夜曲」が，そして「交歓記誌」が，恋人の不在を契機として空想をくり広げたものであったと同じく，「月蝕皆既」も，また，現実によって拒絶された「エレナ」との「交歓」を，ほしいままに虚構のうちに展開したものであった。

(4)「二月の海」の少女

これまでの考察から，ただ一つ確認されることは，朔太郎の，恋人＝「エレナ」にたいするイメージが，つねにつよく，海という背景に固着しているという事実である。

ここで思い起こされるのは，朔太郎が，明治44年から翌年にかけて，しばしば大磯の海をおとずれ，ある「少女」の思い出にひたっているという，年譜上の事実である。

明治44年の2月，朔太郎は，きゅうに思いたって，大磯の海をおとずれている。この時のことは，『ソライロノハナ』の「二月の海」にくわしい。そのなかで，朔太郎は，「五年まへの夏，希望に輝く瞳を以て此処の松林の中から大洋の壮厳を祝した紅顔の少年は頽唐の骸骨となつて長い漂泊の旅から帰つて来た」と記し，「五（いつ）とせのむかし女を恋したりき／その頃のことすべて美し」と歌っている。（『全集』第15巻，19頁）

その翌年，明治45年の6月にも，朔太郎は，大磯をたずねている。6月22日付の萩原栄次宛「書簡」に，朔太郎は，つぎのように記している。

> 罪人のよう（ママ）に，私は都を逃れてこゝの海に漂泊して来ました，怪しきまでに痛々しい

紳経の刺激は私に海へ行けと命じました，／はてしもない青海原と，夢みるような海潮の響は，どんなに，此の頃の暗愁に閉ざされた心をはればれした愉楽の世界へ導いて呉れる事かと，胸を轟かしながら初夏の大磯をたづねました，／あゝ然しそこには只深い沈黙と苦痛の憂色が漂ふて居るばかりでした，／去年の冬，矢張同じ思で此処へ逃れて来たときに，不幸にも私が見出した絶望の海は，今日もまた私の前に横つて居るばかりでした，

このなかで，「数年まへ，私は何事をも知らない幸福の日を無邪気の少女たちと一所に，こゝの二階に送つた事がありました」と述べているのが，「二月の海」の「五年まへの夏」と同じ出来事をさしていることは，これにつづけて，「二月の海」のなかの，「きのふまで少女の群と出窓に／歌をうたひし我ならなくに」という短歌を引用していることからも知られる。（萩原隆『若き日の萩原朔太郎』173～4頁，昭和54年6月，筑摩書房）

この二度の大磯行にかかわって，久保忠夫氏は，「萩原朔太郎歌集『空いろの花』贅注――「大磯ノ海」の少女」（『短歌』昭和56年3月）で，「二月の海」第一部「大磯ノ海」は，明治44年の体験をふまえて，明治45年に執筆されたこと，したがって「五年まへの夏」とは明治40年の夏であること，そして，二度の大磯行において激しく朔太郎が慕い求めた女性は，明治40年の夏に大磯で「馴じみに成」った「京子とよし江」という「姉妹の少女」，とりわけ姉の京子であったという考証を展開している。

しかし，この推定には多くの疑問が残る。

第一に，「二月の海」には，「一九一一，二」（明治44年2月）というはっきりした日付がある。しかも，「二月の海」に記された短歌のうちの三首は，『スバル』明治44年4月号に発表されている。こうした事実を無視して，「大磯ノ海」が明治45年に制作されたとするのは，「五年まへの夏」を明治40年の夏に結びつけるための強引な作為のように感じられる。

第二に，「二月の海」の「希望に輝く瞳を以て」という記述に関連して，久保氏は，明治40年の夏は，第五高等学校への入学も決まり，「この夏ほど朔太郎にとって得意の夏は生涯なかった」と述べている。しかし，医師への道を期待されていた朔太郎にとって，第一部乙類（英語文科），しかも熊本という辺境の高校への入学が「得意」といえるかどうかは，はなはだ疑問である。事実，朔太郎は，一年たらずでそこを退学している。

第三に，「少年」あるいは「少年時代」という言葉を，朔太郎は，いっかんして前橋中学校卒業以前の時期をさすものとして使用している。[8]「二月の海」で朔太郎は，過去の日を「少年」としてなつかしんでいる。このことは，「五年まへの夏」が前橋中学校卒業後の明治40年の夏ではなく，それ以前の夏であることを推測させる。

最後に，「大磯ノ海」の「少女」が「京子」であるとして，久保氏自身認めているように，「二月の海」第二部「平塚ノ海」のヒロインは「エレナ」である。この両者は，「二月の海」という作品において，どのように結びつくのか。久保氏の考証の最大の難点はここにある。もし，「大磯ノ海」でせつに求められた「五とせのむかし」に恋した女が，久保氏のいうように「京子」であったとすれば，「二月の海」にたくした朔太郎のモチーフはいったいなんであったのか。

ここで，もういちど「大磯ノ海」を読みかえしてみよう。

さびれきつた冬の海水浴町にも流石に夜の灯は紅くにほつた。／ところの流行唄を弾

くとき何故か女は悲しい目付をして私にあることを訴へたのである。〃かの少女唄をうたへば悲しめる／我も冷えたる盃をあぐ〃うれひつつある少年と知るよしも／なければ彼はいそしみて弾く〃少年の心をそそる仇言も／ただに悲しみ空耳にきく〃美しき言葉すくなの少年よ／かく言ひかれは嫋めきてきぬ〃海に来て泣きてかへらん我ぞとは／いかで知るらん昨夜の少女は〃美しき海の少女と寝し故に／潮の香あびしにほひこそすれ〃されど飽和したやうな重い心の沈滞を海へ来て釈かうとしたのは愚かであつた。／翌る朝，私は飄然として其処を立つた。どこまでも静をいとうて動を愛する私は生れながらに漂泊の運命をもつて居るのではあるまいか。(『全集』第15巻，20～1頁)

ここには，海水旅館の一夜，朔太郎と「少女」との交歓が描写されている。しかし，ここに語られているのは再会のよろこびではない。むしろ，はなやいだ「少女」と，朔太郎の心のうちなる「悲しみ」との断絶である。明治40年夏に「京子」と知りあったという久保氏の考証を認めたとしても，「大磯ノ海」の「少女」は，「京子」ではありえない。

おそらく，この「少女」は，海水宿で客の相手をするような女性の一人であったろう。いずれにしても，朔太郎が「二月の海」で，せつに再会をのぞみ，大磯へと足をむけた相手は，「大磯ノ海」の「少女」では断じてない。「五とせのむかし」に恋し，いまもはげしく朔太郎が恋したのは，「平塚ノ海」の「少女」＝「エレナ」以外には存在しない。

「二月の海」でいう「五年まへの夏」とは，それでは，いつのことか？

それは，おそらく明治38年，朔太郎が前橋中学校五年の夏であったと考えられる。明治38年の夏を「五年まへの夏」と表記するのは，「二月の海」が明治44年2月という，年が明けてまもない時期に書かれたことを考慮すれば，けっして不自然ないい方ではない。「五(いつ)とせ」という言葉のもつ響きの問題もあったろう。

この時，大磯の海岸で，朔太郎と「エレナ」とのあいだに，なんらかの交渉があった。[9] そして，それが，「エレナ」との，唯一の具体的な交渉であった。朔太郎が，「エレナ」を思うたびに回帰する，それは原点であった。このように考えると，朔太郎において，恋人の存在が，つねに海を背景として登場する理由が納得されるのである。

この推測は，固執するつもりはないが，また，けっして根拠のないものでもない。

明治38年こそは，朔太郎の「エレナ」にたいする感情がもっとも高揚した時期であった。『ソライロノハナ』のなかの，この時期に制作された短歌のうちには，はげしい恋愛感情を吐露したものが数多く見られる。「君まつと一日は楽し君を恋ふと／千夜は果敢なき夢みてしがな」「ただ願ふ君がかたへにある日をば／夢のやうなるその千とせをば」「ああ二人恋しるものと見交はして／笑めばあまねく春はたらひぬ」(『全集』第15巻，39～41頁)

萩原医院の長男朔太郎と，生薬屋「伊勢屋」の娘ナカとの間が，朔太朗が「医師になる見込がある」あいだは「漠然と容認されていた」という磯田光一の指摘もうなずける。(「日露の戦後――萩原朔太郎（三）」『群像』昭和60年8月，260頁)

この年の8月，朔太郎は，東京の母方の祖父八木始宅に逗留し，その間，大磯で海水浴を楽しんでいる。この一行のなかに，東京の共立女学校の学生であった妹ワカが混じっていたことは確実である。三年前の明治35年8月にも，朔太郎とワカは，やはり八木方に滞在し，ともに九十九里浜に遊んでいる。(前掲『若き日の萩原朔太郎』16頁)

そして，さらに，その一行に，ワカの親友であった，馬場ナカ（のちの「エレナ」）が

加わっていたとは考えられないだろうか。[10] この時のことを，萩原栄次に伝えた，8月20日付の「書簡」の末尾に記された，「夕月夜潮なる音に／あこがれて，君来る／途を浪に画きぬ」という短歌に歌われた「君」とは，いったい，だれのことであったのか。（同，49頁）

この作品は，『ソライロノハナ』第一章「若きウエルテルの煩ひ」の「ゆふすずみ」の節に，「桜貝ふたつ重ねて海の趣味／いづれ深しと笑み問はれけり」「海近き河辺に添ひし柳みち／月は二人の肩をすべりぬ」という，海を歌った作品とならべて収められている。（『全集』第15巻，42頁）「桜貝」の歌は，この年7月発行の『坂東太郎』に掲載されており，大磯行以前の作であるが，あるいは，海水浴の計画ははやくからあり，二人のあいだでしばしば話題になったとも考えられる。いずれにしても，海にちなむこの三首の短歌は，この年の夏の海が，朔太郎にとって重大な意味をもつことを暗示している。

「二月の海」の，「少女たち」といい「少女の群」という表現のうちから，妹ワカをとりまく，はなやかな少女の一団が浮かびあがってくる。そのグループのなかに，朔太郎の思い人，ナカがいた。その夏の日の記憶――「海と恋人」のテーマは，そこから発している。朔太郎は，「愛憐詩篇」，『月に吠える』そして『蝶を夢む』と，三回の取捨選択のなかで，結局，「海と恋人」のテーマをもつ作品を，一篇も詩集に採用しなかった。それは，朔太郎と人妻「エレナ」を結ぶ唯一の絆であり，そうであるがゆえに，心の奥底に秘めかくすべきタブーとして意識されたのである。[11]

(5)「浄罪詩篇」への展開

「月蝕皆既」以後，「海と恋人」のテーマは朔太郎の詩篇から姿を消したかに見える。しかし，その余韻は，『月に吠える』に収められた作品のなかにも反響している。

> あほ(ママ)げば高き松が枝に琴かけ鳴らす，／おゆび(ママ)に紅(べに)をさしぐみて，／ふくめる琴をかきならす，／ああ，かき鳴らすひとづま琴の音にもつれぶき，／いみじき笛は天にあり。／けふの霜夜の空に冴え冴え，／松の梢を光らして，／哀しむものゝ一念に，／懺悔の姿をあらはしぬ。（「笛」部分『全集』第1巻，25頁）
>
> 遠夜(とほよ)に光る松の葉に，／懺悔の涙したゝりて，／遠夜の空にしもしろき，／天上の松に首をかけ。／天上の松を恋ふるより，／祈れるさまにつるされぬ。（「天上縊死」同，27頁）

「浄罪詩篇」と名づけられたこれらの作品のうちに，「海と恋人」のテーマを読み取ることはほとんど困難である。しかし，たとえば，『遍路』大正4年6月号に掲載された，リズムと内容からして，「天上縊死」と同時期に制作されたと推定される，つぎのような詩篇と対照させてみるとき，そこに，海のイメージが刻印されていることが知られる。「きみがやへばのうす情け／ほのかににほふたそがれに／遠海(とほみ)の松を光らしめ／遠海(とほみ)の桜を光らしめ／浪は浪浪きみがかたへと。」（「叙情小曲」『全集』第3巻，111頁）

この作品を見れば，遠くに海があり，松の根本に，どうどうと波がうち寄せていることがわかる。「菊」と書き，「桜」と改め，ついに「松」にいきつく過程において，「遠海」は，「遠夜」へと改稿され，海のイメージはほとんど消し去られてしまっている。しかし，「天上縊死」の背後に，海が広々とひろがっていることは，こうした推敲の過程[12]を見れば明らかである。

発表されないでおわった，「笛」の原形を示すものと推定されるつぎの未定稿[13]のうちに

は，さらに明瞭に「海と恋人」のテーマが刻印されている。

この海岸の別荘に来て病を養ふ人々の父親も／＜また＞琴をひく見知らぬ＜美しき異性の詩人も＞貴族の娘も／庭に出でゝ見よ／＜障子を開けて空≪をみよ，≫に見入れよ＞／前裁（ママ）に立ちて眺めよ／＜神の声＞／その求める＜汝等の神の声＞異性の愛は＜松の木の＞天上にありてきみを……／松が枝高く／いかに美しき名月の夜なるぞ

（無題，同，390頁）

「笛」の舞台も，また，海であったことを，この草稿は明らかにしている。「海岸」に「病を養ふ」女性といえば，朔太郎が，大磯に，そして七里ヶ浜にたずねあぐねた，「エレナ」以外に考えられない。事実，「笛」には，六種の草稿が残されており，そのなかには，「――＜既に＞別れし＜彼女に＞E女に――」という献辞をもつものがあり，抹消された一節に，「＜わが恋もえにしも失へり＞」とある。（『全集』第1巻，356頁）

以上見たように，「歓魚夜曲」に発し，「交歓記誌」をへて，「月蝕皆既」へといたる「海と恋人」のテーマが，朔太郎自身は隠蔽しようと意図したにもかかわらず，『月に吠える』の中核をなす「浄罪詩篇」のうちに，その痕跡をとどめていることが確認される。(14) このことは，「浄罪詩篇」の背後に，「エレナ」への恋愛感情を読みとろうとする試みとしてではなく，「浄罪詩篇」を，朔太郎のいっかんしたモチーフのうちに位置づけようとする試みとして，重要な意味をもっている。

従来，「浄罪詩篇」の背後に，なんらかの「罪」を前提するのが一般的であった。はやく，伊藤信吉氏が，「「浄罪詩篇」の周辺」（『無限』昭和37年12月）において，「ところで私のいぶかしくおもうことは，その当時の朔太郎が，なぜそんなにも暗い情熱で“罪”や“懺悔”の意識にとらえられたかということである」「そのような意識がなにを契機にして触発されたか，その起因をつかむことができない」（『日本文学研究資料叢書萩原朔太郎』91頁，昭和46年，有精堂）と提起して以来，この問題は，「浄罪」の対象としての「罪」とはなんであったかという点をめぐって議論されてきた。

このように，背後に「罪」を前提することによって，その「罪」を「懺悔」し，救いを求めるところに「浄罪詩篇」のモチーフを求めるのが一般的であった。そこには，朔太郎と「エレナ」とのあいだに，不倫と呼ぶにあたいするような，なんらかの具体的な交渉が進行中であったという推定が，つよく作用しているように見える。(15)

田村圭司氏は，『萩原朔太郎研究――抒情の構図』（昭和58年6月，明治書院）で，「天上縊死」にふれて，「これは，罪びとたる自己が「懺悔の涙」を流しながら罰を受ける姿を描いたものであろう」と分析し，さらに，「これは，「ひとづま」の「琴」に「もつれ吹く」「天上の笛」を欲するという禁忌侵犯の故に「懺悔の姿」が顕現する「笛」と，同じ構造を持っている」と指摘している。（68頁）

また，佐藤房儀氏は，「天上縊死」について，つぎのように論じている。「この詩は自殺による贖罪と，天上の救いが書かれている。」「ここでは自殺は救いとして隠湿な感じを与えない。自殺は理想の行為ですらある。」（『詩人萩原朔太郎』232頁，昭和52年11月，双文社出版）

しかし，おそらく，事態は逆であったろう。朔太郎は，自らのはげしい思いが，まったく無効であるという事実に直面したとき，「罪」という虚構なしには，それを受けいれることができなかったのだ。「罪」を犯したがゆえに，自分の思いは無効である，というよ

うに。11月25日付の北原白秋宛「書簡」に，「私は恐るべき犯罪（心霊上の）を行なつたゝめに天帝から刑罰されて居るのです」(『全集』第13巻，70頁）と告白され，12月16日付の萩原栄次宛「書簡」に詳細に報告された（『若き日の萩原朔太郎』195～98頁),「草木姦淫」の体験は，まさしく，そのような虚構として要請されたものであったといえよう。

「天上縊死」は，なんらかの「罪」を「懺悔」するために「縊死」したと解読されてはならない。ここにあるのは，はげしい希求の不可能性と，そのはてにある死である。「天上の松」に恋こがれて「縊死」した姿が，そのまま「祈れるさま」をかたどっている，というのが「天上縊死」の構図であり，モチーフである。「笛」の場合も同様に，田村氏のいうように「禁忌侵犯の故に「懺悔の姿」が顕現する」というのではなく，「かなしむものの一念」が，そのまま「懺悔の姿」をとってあらわれている，と読むべきであろう。つまり，求める思いの強さが，こばまれていることによって，そのまま，その究極において「懺悔」という宗教的なかたちを示顕するのである。

朔太郎は，『地上巡礼』大正4年1月号に掲載された，「笛」「亀」など五篇の送稿を知らせる，大正3年12月10日付の白秋宛「書簡」で，「小生の作は最初実感より出で一時空想に入り最近に至つて二度実感に立房る傾向有之候」と述べている。(『全集』第13巻，71頁）

「最初実感より出で」が，「幼年期の真実」を歌った，朔太郎の詩作の出発点をなす「愛憐詩篇」を意味することは疑いない。[16]「一時空想に入り」とは，なにを意味するか。おそらく，「歓魚夜曲」「交歓記誌」「月蝕皆既」など，恋人との交歓を虚構のうちにくり広げた一連の作品を指すものと考えられる。そして，「二度実感に立房る傾向」が，「浄罪詩篇」を指示していることは明らかである。つまり，「浄罪詩篇」において，朔太郎は，虚構を離れ，自分自身のおかれた現実へと，たちもどったと感じているのである。

初期「愛憐詩篇」は，「少年時代」という仮構の世界のうちに退行することによって，「孤独」と「憂愁」から逃避しようとする試みであった。[17]そして，「海と恋人」のテーマも，また，それが，現実における不可能性を契機とする点において，もう一つの逃避のかたちであったといえる。「浄罪詩篇」は，そうした二つの逃避を超えて，自らのみじめな現実と直面することにおいて，新しい朔太郎の出発となった。「エレナ」への思いを，さいげんない空想のなかで，ほしいままに展開することの愉楽から身をもぎはなし，朔太郎は，自らのおかれた現実へとたちむかうことになる――それが，「月蝕皆既」から「浄罪詩篇」へといたる朔太郎の軌跡のもつ，本質的な意義であった。

（平成元年9月14日受理）

註

(1) 「演説」という言葉については，「感傷詩論」(『詩歌』大正4年12月）に，「幼児と聖人は神に聴かれんために祈禱し，衒学者及び説教者は傍人に聴かれんために祈禱す。／前者の祈禱は『詩』なり，（中略）後者の祈禱に至りては『演説』にして詩に非ず」とある。(『全集』第3巻，161頁）

(2) 日本ハリストス正教会は，ロシア正教の流れをくむ。牛丸康夫氏の『日本正教史』(昭和53年5月，日本ハリストス正教会教団府主教庁）によれば，「日本への正教布教の第一歩は文久元年ニコライ師の渡来から始まり」，明治45年7月の時点で「正教会聖堂，会堂，講義祈禱所の数二

百六十六ヶ所，信徒総数三万三千三百七十七人」を数えたという。朔太郎が愛読した『カラマゾフの兄弟』には，「奇蹟を否定したる新教徒の罵や及ぶべからず」（第2巻，531頁）というプロテスタントを批判する書き込みがあり，また「吾等は汝の事業を変へて奇蹟と神秘と権威との上に宗教を置いた」という部分に，「カトリック教の真理」（同，534頁）という書き込みが見える。朔太郎のドストエフスキーへの関心のうちには，「エレナ」の属するロシア正教（朔太郎はこれを「カトリック」と呼んでいるが）への関心があったことが推測される。

(3) 『室生犀星文学年譜』382～3頁，昭和57年10月，明治書院。なお春子については，「習作集第九巻」に「春子に」という，この年九月に制作されたと推定される作品が収められている。「きららに鮎をはしらせむ／ひとりしあれば悲しきものを／ひねもす利根を岸ぞひに／凍れる鮎をはしらせむ／ゆきの水上光る日に／まだ見ぬきみがいたいけの／素足のうへをはしらせむ」（『全集』第2巻，515頁）朔太郎が，犀星と春子の関係のうえに，自らと「エレナ」との関係を重ねあわせていたことがわかる。

(4) 岡庭昇氏は，この「書簡」を引いて，「朔太郎は，あきらかに劇性を欲求していた。そしてそれは，仮構によって充たされるしかなかったのである。ドラマを切実に欲し，しかもみえすいた仮構によってのみそれを得ることができた」と論じ，「みちゆき」などの背景として想定されている，「エレナ」との「姦通」は「フィクション」と考えるべきだとしている。（「非定型の「危機」── エレナとはなにか」『国文学　解釈と鑑賞』昭和52年6月，75～7頁）

(5) 大正3年1月20日の「日記」につぎのような記述がある。「Circle に行つた。今夜はZwei mal である。その Mädchen の私の心を牽くことは先夜にもいやました。涙は頬につたはつた。／恋でもない，同情でもない，勿論単なる哀憐の心でもない。かうした一種のなつかしみは私にとつて何より尊い詩境の楽である。漂泊者の群は明日はこの地を去るのである。少女子よ，おん身の上に幸あれ。／「アヱ・マリヤ，彼女の上に祝福を垂れ給へ」」（『全集』第15巻，122頁）「Circle」とは，最後の一行から見て，キリスト教にかかわるもの，おそらく教会の集会であったと考えられる。「Mädchen」とは，①「恋でもない，同情でもない，勿論単なる哀憐の心でもない。かうした一種のなつかしみ」という表記が，「ノート　一」の「もう彼女との間には恋はない。併し恋以上の不可思議な愛がある」という表記に類似していること，また，大正3年1月24日の「日記」に，「エレナ」との関係を「恋にあらざる恋」と表記していること（これらの表記は，たんなる男女関係を超えた深い結びつきを意味するものではなく，片思いにたいする朔太郎なりの表現であったと考えられる），②「漂泊者」という表記が「二月の海」の「紅顔の少年は頽唐の骸骨となつて長い漂泊の旅から帰つて来た」「私は生れながらに漂泊の運命をもつて居るのではあるまいか」，明治45年6月22日付萩原栄次宛「書簡」の「私は都を逃れてこゝの海に漂泊して来ました」などの表記と共通していることなどから，「エレナ」を指していると考えられる。すでに人妻となった26歳の女性を「Mädchen」と呼ぶのはおかしいことであるが，朔太郎にとって「エレナ」がつねに少年時代の記憶にある「少女」と結びついていたことを考えあわせれば，それも納得できる。つまり「日記」のこの記述は，マンドリン演奏会の相談のために教会の集会に出席し「エレナ」と出会ったことを記したものと解読することができる。しかも，これは，「Zwei mal」＝二度目であったという。一度目がいつかは記されていないが，1月1日の記事に「自分は第一にロマンチックを欲して居る。矢張 FEMME が自分の感情の主格になつて居るといふのは嬉しいことである」（同，119頁）とあり，この日記帳（博文館当用日記）が書きはじめられた動機自体が，その「エレナ」との一度目の出会いにあると推測される。この日記には，朔太郎が「エレナ」に手紙を書き（1月10日），「エレナ」から拒絶の意志を示す「白紙」の返信を受けとったこと（1月24日），朔太郎が「エレナ」夫妻にあててマンドリン演奏会の招待状を発送したこと（1月23日）など，朔太郎の内部で「エレナ」への感情がにわかに高まりを見せたことが記されている。この時期，朔太郎は，教会の集会で「エレナ」と顔を合わせることで「わが空想のローマンス」（1月9日）をふたたび燃えたたせたことが知られる。そして，「エレナ」との関係が絶たれるとともに，朔太郎は日記への関心を失い，

2月6日をもって，この日記帳は放棄されることになる。ところで，大正3年1月20日のこの記事について，嶋岡晨氏は『伝記萩原朔太郎』（昭和55年9月，春秋社）で，「文中の Mädchen は遊廓の女である。遊廓にかよって性欲を解消しつつ，「詩境」をそこに見出す朔太郎」と書いている。（上，105頁）しかし，これは支持しがたい。たしかに，朔太郎は，この時期，「遊廓」にかよっている。同じ日記の，1月25日の記事「夜はたうとう FEMME に行つた。つぶれたやうな顔のFが来た。しかし私は強ひて享楽した。幾度もキスをした。愚かしいことではあるがあながちに無意味な浪費でもないと思ふ。」，2月5日の記事「夜は K.T.K. へ行つた。醜いといふよりは妙なゲヂヒトの FRAU がきた。BETRINKN……」などは，それを示している。しかし，これらの記事から見て，朔太郎は，「遊廓」の女に，嫌悪は感じていても，けっして「詩境」を感じてはいない。朔太郎がはげしい後悔にさいなまれていることは，2月6日の記事に「Letzte Nacht の記憶がしばしば繰り返されることは死よりも苦痛である」とあることからも知られる。これらの記事を，さきの1月20日の記事にくらべると，そこには，女性に対する態度において　明白なトーンの違いが感じられる。これらのことから見て，さきの記事は，「遊廓」にかかわるものとは考えられない。

(6) 北川透氏が指摘するように，「本質的なことは，朔太郎のエレナを失った，あるいは失うかもしれないという不安な欠如感が，イメージとしての性愛の異常な高ぶりを喚びこんでいる，ということである。」（「罪びとまで ――「浄罪詩篇ノオト」への註」『国文学　解釈と教材の研究』昭和53年10月，44頁）

(7) 「習作集第九巻」では，すぐあとに「九月の市街」という作品が収められている。また，二つ前にある「幼魚」は，「もつれつゝむらがりにつゝ」「みなそこにくろくさびしき幼魚のこころ」などの行から，「月蝕皆既」と同時期に制作されたと推定される。

(8) 拙稿「仮構された「少年時代」―― 萩原朔太郎「愛憐詩篇」の形成」『文芸研究』平成元年9月参照。

(9) 「習作集第八巻」に収められた，大正2年5月中旬の作と推定される，「ゆく春のありや」の「えこそ忘れめや／そのくちづけのあとやさき／流るゝ水をせき止めし／わかれの際の青き月の出」というフレーズは，その交渉の具体的内容を暗示している。

(10) ナカが，病気療養の地として，明治44年の時も，大正2年の時も，鎌倉近辺の海岸を選んでいることは，この地域にナカの縁故と結びつくものがあったことを示している。また，ナカの娘宮下清江氏は，「父親が兄弟中特別に母を可愛がっていて，進学中の兄弟を中途で退学させてまで母を女学校にやったほどでした。東京に出して更に上の学校にやるつもりがあったということです」と語っている。（「母エレナのこと」『全集』第14巻「月報」14頁）ナカが，かなり自由な行動を許されていたこと，朔太郎の妹ワカと同じく東京の学校へ進学する話があったことが知られる。

(11) 大正4年前半頃と推定される制作年次不明の未定稿に，「＜幼馴染の君＞」「＜幼なき日の≪少女に≫友だちに＞」「＜幼なき追懐＞」などと題名が構想され，最後に「遠き風景 ――幼なき日の少女子に」と確定された作品がある。「＜しんねんたる柳の樹≪ぬれ≫立より＞／道路はしろじろ／＜うねりて＞／野はほのぼの／しんしんねんねんたる柳の樹＜ぬれより＞ぬれを／うねり＜て＞くねりてすぎさるものは自動車＜の一連→の白き一連＞か／うちふす麦に風あり／けふもさびしき＜子供＞子供づれ指さし／＜遠≪見≫海に風あり＞／遠き岬を＜すぐれば＞こゑさ＜れば＞りくれば／しらたえ（ママ）まさる波路のうたかた／月の出しほに／＜道はほのぼの＞」（『全集』第3巻，346～7頁）この作品からも，とおい少年の日に，「幼馴染」の「少女」とのあいだに，海を背景としたなつかしい思い出が，朔太郎の心の奥にかくされていたことが知られる。

(12) 「叙情小曲」の草稿に，「＜遠夜の≪菊≫窓のうすあかり＞／＜遠夜の桜ほの白し＞／遠＜夜＞海の桜をひらかしめ／浪は浪々／きみがかた＜に＞へと」（部分『全集』第3巻，447～8頁）とある。

(13) この未定稿は，『全集』第三巻「未発表詩篇」では，末尾の方に配列されているが，①文語体

であること，②「笛」の草稿の一つに，「＜みよ≪吹く≫横笛は天にあり＞」（『全集』第1巻，355頁）とあるのが，この未定稿の「見よ」「みよ」「見入れよ」「眺めよ」などの命令形の表現につうじること，③同じ「笛」の草稿及び別の草稿に，「天上」の語が二度づつ出現し，「笛」の「いみじき笛は天にあり」というフレーズが，「わが横笛は天＜上＞にあり」（同，356頁）から発展したものであり，この未定稿の「天上」という言葉と結びつくことなどから，「笛」の原形と推定できる。

⑭　坪井秀人氏は「エレナと雨 ――『青猫』の世界」（『日本文学』昭和61年9月）で，『青猫』に出現する「夢の中の女」が,大正6年5月に病没した「エレナ」の幻影であるとしたうえで，海岸を背景とした作品「艶めかしい墓場」（『詩聖』大正11年6月）と，『ソライロノハナ』「二月の海」に示された「朔太郎の海の原イメージ」との連続性を示唆している。（『萩原朔太郎・感情の詩学』181頁，昭和63年，有精堂）また，小松郁子氏は「朔太郎とエレナ ――実在の恋人を求めて」（『現代詩読本萩原朔太郎』昭和54年6月，思潮社）で，朔太郎の，死の半年前，昭和16年11月11日付の上田静栄宛「書簡」に，「この頃よく夢を見ます。数日前には江の島へ遊んだ夢を見ました。」とある部分を引いて，「夢の中に詩人がひきよせたのはエレナにちがいないという思いになる」と述べている。（141頁）もしそうであるとすれば，「海と恋人」のテーマは，生涯朔太郎をとらえつづけたということになる。

⑮　赤城毅氏は，『題のない歌――朔太郎考』（昭和56年6月，檸檬社）で，「「浄罪詩篇」と呼ばれる詩篇のどれひとつとして，＜懺悔＞の痛みを読むものに伝えてくれないのは，彼の意識が宗教上の贖罪観とは無縁のもので，その＜懺悔＞は彼の意識が旧刑法の蜘蛛の糸にがんじがらめにからめとられたところからの発想であったことを物語っている」（95頁）と指摘し，「エレナ」との「姦通」の事実が露顕することへの恐怖が「浄罪詩篇」の背景にあったと断定している。

⑯　大正4年（推定）の奈良宇太次・金井津根吉宛「書簡」で，朔太郎は，「月見草」など「幼年期の詠嘆」を歌った初期「愛憐詩篇」の作品について，「すべて私の作は実感です，ウソは作りません」と述べている。（『全集』第13巻，468頁）

⑰　前掲拙稿参照。

〔付記〕引用文中で新字体のある漢字はそれに改めた。傍線はすべて引用者による。抹消を示す＜　＞　≪　≫の符号は『全集』に従った。｛○○・○○｝は，原文では並列して表記されている。作品は，初出形を尊重した。

〔追補〕久保忠夫氏は，『萩原朔太郎論』上（平成元年六月，塙書房）所収の「大沼竹太郎のこと」（初出『東北学院大学論集（一般教育）』昭和五八年一〇月）で，大沼についてくわしく紹介している。それによると，大沼は，ニコライ神学校聖歌学校の出身で，前橋にはハリストス正教会の「詠隊教師」として赴任してきたという。事実，大正三年一月七日の「日記」には，「夜大沼氏にさそはれ正教会のクリスマスに出演す」とあり，大沼がロシア正教と深い関係にあったことがしられる。とすれば，大沼は，エレナの所属する高崎ハリストス正教会の事情にも通じていたわけであり，朔太郎にとって，大沼は，マンドリンの友というだけでなく，エレナとつながる窓口という意味もあったといえる。（エレナの受洗の事実なども大沼によって伝えられた可能性がたかい）一月二五日の高崎でのマンドリン演奏会も，大沼と高崎ハリストス正教会とのつながりで計画されたものと考えられる。